僧団内の在俗者に関する一考察

富 増 健 太 郎

1. 問題の所在

仏教僧団は出家者のみによって構成されていたと考えられている。しかし律にはアーラーミカ (ārāmika) と呼ばれる在家者が仏教僧団に関わっていたと書かれている箇所がある。アーラーミカは仏教僧団に関わる在家者であるといわれているがまだ多くのことが不明である。しかし初期の仏教僧団の実態を解明する上でアーラーミカは重要な役割を担うと考えられる。そこで今回、アーラーミカとはどういった存在でありまた僧団ではどのような役割であったのかということを考察する。

2. アーラーミカの位置付け

「パーリ律」捨墮 (nissaggiya pācittiya) 第 23 条の因縁譚に「ビンビサーラ (Seniya Bimbisāra) によるアーラーミカの布施」が書かれている。山中で作業をしているピリンダヴァッチャ (Pīḷḍavaccha) の所へやってきたビンビサーラがなぜアーラーミカにその作業を行わせないのかと聞く。これに対してピリンダヴァッチャはアーラーミカを用いることが許可されていないからであると答える。そこでビンビサーラはアーラーミカを布施するので許可を取るよう勧めピリンダヴァッチャは世尊に願い出てアーラーミカを用いることが許される。つまりここで仏教において初めてアーラーミカが許可されたのである。しかしながらビンビサーラとピリンダヴァッチャの会話においてアーラーミカに関する説明がまったくない。また「パーリ律」以外の広律においても同様の記述はあるがやはりそこでもアーラーミカについて詳しい説明はない。以上のことから考えると、世尊が許可をする以前からアーラーミカと呼ばれる在家の人々が存在していたのではないだろうか。つまりアーラーミカは仏教特有のものではなく当時のインドの宗教においてごく一般的な存在であり、それをある時期に仏教が取り入れたのではないかと

考えられる。

3. アーラーミカと在家信者

それでは仏教ではどういった人々がアーラーミカになったのであろうか。まずアーラーミカとして最初に考えられるのは仏教の在家信者である優婆塞・優婆夷であろう。そこでここではアーラーミカと在家信者の関係について考える。「根本説一切有部律」には「時給侍人雖施入僧未罽王役」という記述がある。つまり「根本説一切有部律」では給侍人は元、王に仕えていた人々として書かれている。『十誦律』では摩訶迦葉に淨人として死罪の盜賊を与えられる。罪人がアーラーミカになるということが一般的なことであったのかはわからない。ただし他の律ではピンピサーラがアーラーミカを布施する相手はピリンダヴァッチャであり、また罪人がアーラーミカとなるというのも『十誦律』のみである。そのためこの『十誦律』の記述を即、信用することはできない。一方で「パーリ律」と『五分律』ではどういった人がアーラーミカとして布施されたのか明記されていない。そのため『十誦律』のように捕らえられた罪人がアーラーミカとなったということもあったのかもしれない。いずれにしても「パーリ律」、『五分律』、『十誦律』、「根本説一切有部律」の場合、在家信者がアーラーミカになったということが明記されていないという点で一致している。しかし『摩訶僧祇律』には在家信者がアーラーミカになるということが書かれている。ここでは園民を布施するというピンピサーラの申し出を断ったピリンダヴァッチャに聚樂の人々が自らアーラーミカとなることを申し出る。これに対してピリンダヴァッチャが五戒を受けるならアーラーミカに言う。つまり在家信者となることがアーラーミカになるための条件となっているのである。これは上で見た諸律とは明らかに異なっている。ただ気をつけなくてはならないのはここでは在家信者がアーラーミカになったのではなく聚樂の人々がアーラーミカになるために在家信者になったということである。アーラーミカになるために在家信者となったということは聚樂の人々は元々は在家信者ではなかったということである。また自発的に在家信者になったわけでもない。つまり仏教を信奉し自発的に在家信者となった人々とは異なるのではないだろうか。いずれにしてもこの『摩訶僧祇律』の記述から優婆塞・優婆夷がアーラーミカとなることもあったのではないかと考えられる。

アーラーミカと在家信者の関係を考える上で興味深い記述が「パーリ律」の波羅夷罪の部分にある。それは還俗を希望する比丘が還俗後に在家者か優婆塞か

アーラーミカか沙弥か外道か外道の声聞か非沙門か非釈子になることを願うという記述である。ここでは優婆塞とアーラーミカが並列に並べられているように読める。また外道や外道の声聞、非沙門、非釈子という仏教と関係のないものと並べられているのも気になる。とにかく以上のことからアーラーミカと在家信者の関係について考えると在家信者がアーラーミカとなることもあったのではないかと考えられる。しかし最初期のアーラーミカは在家者ではあるが在家信者ではなかったのではないだろうか。なぜならもし在家信者がアーラーミカになったとしてもそれまでと特に変わることなく在家信者として仏教僧団に関わっていくことになるだろう。それなら新たにアーラーミカという呼称がうみ出されることはない。だがそれまで仏教僧団と関わりを持っていなかった、例えば王に仕えていた人々が仏教僧団における仕事をするようになるとその人々を呼ぶ名前が必要になる。彼らは在家者であり仏教僧団に関わってはいるが全員が仏教を信奉しているわけではない。そこでそういった人々がアーラーミカと呼ばれるようになったのである。ただ時代とともにアーラーミカが仏教を信奉するようになることもあったろうしまた優婆塞・優婆夷がアーラーミカのかわりをすることもあり同一視されるようになったのではないだろうか。いずれにしても今のところ証拠がなくなただの推測に過ぎない。そのためこのあたりのことは今後の課題とする。

4. 僧団内における役割

次にアーラーミカの僧団内における役割について考える。「パーリ律」においてピンピサーラがアーラーミカを布施する相手はピリンダヴァッチャであり、他の律でもほぼ同じである。一方、『十誦律』には「衆僧」のため「根本説一切有部律」には「僧衆」のために布施したという記述がある。衆僧、僧衆共にサンガのことであろう。このことから考えると「ピンピサーラによるアーラーミカの布施」の記述ではピリンダヴァッチャにアーラーミカを布施したと書かれているが実際には僧団に布施するというのが一般的だったのではないだろうか。アーラーミカが僧団に布施されたと考える理由としては次の二つがある。まず『五分律』には布施されたアーラーミカが仕事として僧団の房舎の掃除をしていたという記述がある。これよりアーラーミカが僧団における雑務を行っていたのではないかと考えられる。また「パーリ律」や『五分律』にはアーラーミカが作った集落にピリンダヴァッチャが乞食に行くという記述がある。もしアーラーミカがピリンダヴァッチャにのみ布施されたのだとすればわざわざ乞食に行かなくても食事を

得ることができたのではないだろうか。いずれにしても決定的な証拠ではない。しかしこういったことから僧団におけるアーラーミカの役割について一つの仮説が考えられる。それはアーラーミカが特定の比丘のために何かを行うことも時にはあったが、基本的には僧団全体の仕事を行うことが役目だったのではないだろうかということである。そしてその仕事とは本来は比丘達が行うべきことではあるが悟りとは直接関係のない雑務だったのではないだろうか。アーラーミカが雑務をかわりに行うことにより比丘は修行の時間が確保できる。これこそ本来のアーラーミカの役割だったのではないだろうか。

5. 成立について

最後にアーラーミカがいつ頃、仏教に取り入れられたのかについて考え結論とする。すでに見たようにアーラーミカの役割は僧団内における雑務を比丘にかわり行うことである。しかしその雑務はあくまでも僧団全体のものであり比丘個人のものではない。このことからアーラーミカが存在する僧団では比丘は修行のみに集中することができたのではなかと考えられる。逆に言えば比丘がすべき雑務が少ない僧団ではアーラーミカは必要なく存在しなかったであろう。では仏教において僧団内に種々の雑務が生じたのはいつ頃のことであろう。おそらくそれは僧団が定住して以降のことではないかと考えられる。僧団が定住し比丘達が共同生活をするようになり種々の雑務が生じた。雑務を行う比丘は修行の時間が減ってしまう。そこで出家者にかわり雑務を行うアーラーミカが仏教でも用いられるようになったのではないだろうか。いずれにしてもアーラーミカに関しては不明な点がたくさん残っている。そのため今後とも継続して研究を続けていくつもりである。

注記)

発表時に山極伸之先生から Nobuyuki Yamagiwa 『ārāmika-Gardener or Park Keeper?: one of the marginals around the Buddhist saṃgha』 (Kokusai Bukkyoto Kyokai, 『Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo MORI』, 2002.12, pp.363-386.) を遺漏しているとご指摘いただいた。次回の研究の参考とし併せて感謝いたします。

〈キーワード〉 アーラーミカ, ārāmika, 在家者

(花園大学国際禅学研究所研究員)

Buddhist Saṅgha around the fifth century C.E.

71. A Consideration about the Laity in the Saṅgha

TOMIMASU Kentarō

The Buddhist saṅgha was composed of Buddhist Monks.

However, a layman called “ārāmika” was related to the saṅgha. This ārāmika is very important for research on the saṅgha.

Therefore, in this paper,

- What person became an ārāmika?
- What was the ārāmika’s role in the saṅgha?
- When did the ārāmika idea come about?

These three points are considered based on the description “Offering of aramika by Seniya Bimbisāra” in the Vinaya.

72. Two *Uttaragranthas*: a Consideration of the *Upāliparipṛcchā*

KISHINO Ryōji

This thesis concerns the *Uttaragrantha* (=UG), which is a part of the *Mūlasarvāstivādin Vinaya*. UG is extant in Tibetan translation. There is no Sanskrit version of UG, though a few fragments have recently come to light. As for Chinese translation, few studies have been made. UG is not a single text but consists of about eleven texts (chapters?). And there are two *Uttaragranthas*, whose names in Tibetan are slightly different; *’dul ba gzhung bla ma* and *’dul ba gzhung dam pa*. The former is incomplete and includes only one text called *Upāliparipṛcchā*, which is half-finished. The latter is *perhaps* complete and includes the full *Upāliparipṛcchā* and other texts. It has already been pointed out many times that two *Uttaragranthas* exist and one is incomplete, but the differences of the two have never been made clear. In this small thesis, using the *Derge*, *Peking*, *sTog*-palace, and *sNar-thang* versions, I explain simply what kind of text UG is and show the names and folio numbers of its eleven texts, and then report the result of the comparison of the two *Upāliparipṛcchās*; there is little difference between the two.